BAIEIDO-TSUSHIN

梅栄堂通信

Vol.61

'14春号

練りを重ね、伝え続ける当家秘伝の香り

家伝好文木

天然香料を厳選し、その配合を考え、
熟成に月日を費やす…
梅栄堂三百五十年あまりの歴史の中で、
培われてきた秘伝の技を今に伝えるお線香、
それが《家伝好文木》です。
日を追うごとに稀少になる極上沈香、白檀など、
約二十種の天然香料が醸し出す気品ある
香りを、ぜひともご堪能ください。

●家伝好文木　標準小売価格 4,200円（本体価格 4,000円）

創業三百有余年
梅栄堂
〒590-0943　堺市堺区車之町東1丁1番4号
TEL 072(229)4545(代)　FAX 072(227)1672
ホームページURL　http://www.baieido.co.jp

社長雑感

ありそうで、なかったもの…

梅栄堂社長　中田信浩

月日の経つのは早いもので、つい先日新年のご挨拶をさせていただいたと思っておりましたのに、また新たな年がやってまいりました。

より良いお線香をお届けすることが私ども梅栄堂の願いです。そして、それにふさわしい、〈香立て〉もあればいいなあ…と長年考えながらも実現できずにおりました。そんな折、みなさまご存知の工業デザイナーのケン奥山氏といい出会いがあり、すばらしい〈香立て〉が誕生いたしました。

ケン奥山氏は、現代日本を代表する工業デザイナーで、フェラーリをはじめ、最近ではJR東日本新幹線の内装デザインもされるなど大変お忙しい方ですが、そんな中、二点の作品を提供していただきました。

二点とも伝統産業を大切にされる氏のデザインらしく、一点は南部鉄器を使用した、存在感のあるもの（限定販売）、もう一点は有田焼の清々しいデザインの香立てですが、二点とも奥山氏のデザイン哲学である、『モダン、シンプル、タイムレス』を具現した素晴らしいものになったと、大変喜んでおります。良い香りを、良いお香立てで…今年も一年をお健やかにお過ごしいただけたら、幸いです。

さて、最後になりましたが、原材料となります天然香料の価格は、留まるところをしらず、高騰を続けております。わが社としましても、ここ何年か企業努力をしてまいりましたが、残念ながら昨年十月より、価格改訂をさせていただきました。

不本意ではございますが、なにとぞよろしくお願いいたします。

プロフィール

ケン奥山

山形県生まれ。

ゼネラルモーターズ、ポルシェ、ピニンファリーナ社のデザイナーを務めた後、鉄道、船舶、建築、テーマパーク等、多くのデザインを手がけ、現在山形、東京、ロサンゼルスを拠点に活躍する日本屈指の工業デザイナー。

香りの情報館

香り考察

●米田　該典　よねだ　かいすけ

所属：大阪大学大学院医学系研究科医学史料室
薬学博士　神戸市生

専攻：文化財の材質調査と保存の科学、薬用資源学、薬史学
薬学時代には正倉院薬物を調査し、博物館へ移籍後は文化財全般に枠を広げ、いつの間にか海外の文化財にまで手を広げつつある。

薫香を世界に訪ねて

香りの組み合わせを楽しむ日本のこころ

薫香に適した季節ってあるのだろうか？香の研究を始めて間もない頃、幾度か受けた質問だった。確か「薫香は秋から春までのことで、夏は行わない…」と書いてある書籍に出会った事がある。ここで言う夏とは、入梅の頃から秋風の立つ頃までの、じっとりと汗ばむ嫌な季節で、そんな折りは、わずかな風でも逃がすまいと日本家屋は開け放して、緑陰からやってくる爽やかな風を求めてきた。まるで室内も戸外も変わらない状態であった。確かに夏の頃は何処にいても爽やかな風を求めている。

さて、爽やかな香りとはどんな香りなのだろうか？薫香で衣裳に焚きしめるような強い香りではないし、火照った身体にまつわりつくような香りは遠慮したいということでしょう。そんな理由で「薫香の適期は何時？」という質問になるのでしょう。でも世の中には爽やかで軽やかな香りもあるのだから、それを夏に使えばいいのでは…と言う事になろう。夏の香りと呼ぶ事ができる香が尊ばれ、使用されていた歴史はある。でも最近はどうも夏の香りに限らず年中の香りに変化が生じているのではないかと思う。地球温暖化の影響もあるだろうが、確かに夏の暑さは厳しく、しかも長期に及ぶようになってしまった。そこに加えて、冷暖房の完備で家屋の様子も以前とは違い密閉度が高くなっている。部屋の中では料理などの諸々の香りがいつの間にか溜まっては混じり合い、わずかな香りぐらいでは消えてしまう。かと言って香料を長時間焚くのは気が重い。秋から冬は空気が乾き、香りを楽しむのには絶好の季節なのだが、どうもそうとはいいきれないようだ。世の中には様々な香材があり、先人達は秋、冬、春、そして新春等の節目にはそれに因んだ香りを作り楽しんで来た。香の歴史を辿っていると、季節と香の組み合わせに日本のこころを感じるのだが…。

大阪大学医学部　医学史料室
米田　該典

〈写真/イメージ〉

香り考察

◀アラブの人々には
薫香材として欠かせない乳香

西洋の香りの世界…

では、有史以来石造りの家屋に住み、冬の寒さは当たり前、夏でも涼やかな地域、中北欧の人々は香りをどう感じていたのだろうか？なんてことが気になり出した。日本で使う薫香の材料は、ほとんどが東南アジア産で、最近使われるようになった乳香や没薬なども古くからアラブの人達の薫香材だ。考えてみると、欧州産の香材はほとんどない事が判る。それでは、欧州の人々には薫香の風習はなかったのかな、とも考えたものの、国内に薫香材を産しない日本にも薫香の習慣があったことを考えると、それはちょっと暴論だ。欧州は天下の香水を相次いで作出し、今にその文化を残している。

では、薫香のことはどうなのだろう。薫香の最古の絵はピラミッドに描かれた様々な絵で我々は見る事ができる。ここに添付したのは、ピラミッドに描かれていた「ラーの神に香を捧げるエジプト王の図」として知られる図柄の一部を拡大したものだが、此の絵は間違いなく薫香を捧げていると理解されているようだ。

▲ピラミッドに描かれた
〈太陽神ラーに香を
ささげるエジプト王〉
は薫香の最古の絵

ところで、ピラミッドには王が戦勝の祈願に際して、「香草と香料の全てを捧げる…」との主意の文を残しているようである。ここで気になったのは香草と香料を使い分けていることで、ここでいう香料は、薫香料の事だと思ったからである。やがて南欧諸国やアフリカでは様々な興亡があったにしろ、香の文化は北へ広がったはずである。

現在、香料の事をPERFUME（パーフューム）という。ラテン語のPER FUMUMと同意に発する語であって、日本語に訳せば「煙を通して」という意味であろう。

とすれば、欧州では薫香はそんなに特殊なものではなく、香料は薫香材のことであって、欧州の香もそこに始まったのであろう…と、私が薫香に身びいきのあまり、都合のよいように解釈している。このような歴史があるなら、現在も薫香の風習は広く残っているはずだが、中北欧からは薫香料のことで伝わって来る事は少ない。しかし、実際にはかなり多くの香材が消費されていて、その使用が我が国の薫香と大きく変わらない事が判った。今も昔も薫香料の多くは、アジアからアフリカの熱帯に産することが多いが、日欧で使用の香材はかなり異なっている。欧州では、主に樹脂類である。それらを順次取り寄せ調査中だが、洋の東西を問わず理化学調査の情報は少ない。正直なところ遅々として進んでいないことの言い訳としたい。

ところで、欧州ではそんな香材をどのように薫じているのだろうか？様々な文献を探して見たが詳しくは判らない。ただ、蓋のない五～一〇㎝ほどの小さな陶器や金属器に木灰や断熱性の砂などを敷きつめ、その上で燃やしている。薫香煙は開放された部屋でも短時間で充満し、籠るとあっては、扱い難い事であった。エジプト時代以来香煙として味わっていた香気は、中世の頃には香水として、香気を溶かし込むアルコール液や油料にとって代わられた。気体に比べれば、液体は何かに付けて扱い易い。香気を溶かし込んだ香水は瞬く間に欧州全体を席巻し、今に至る香水文化を醸成し、薫香とは違う製法に発展したようである。

香水の事は、我が国には仏教と共にもたらされている。仏前の供養である三具足は、やがて香水を加えたりして五具足などと供養は増えた。しかし、その香水はまさに水であって薫香の香気本体を止める力はない。多くは花や香材を水に浮かべるだけであった。

此のように香の文化もお国柄で変わるが、日本文化の特徴は、建造物の全てが木造であったことに由来しているのではないだろうか。

とすれば新しい建築文化の時代に応じた新しい香のあり方を考えねばならないのかも…。

ちなみに、いま私が座している場はダイセンキャラボクの木陰で、秋の涼風が通り抜けている。

▲古代エジプトの時代から薫香として使用されてきたミルラ（没薬）。中東産（上）とアフリカ産（下）

カモミール

古くから愛され、数えきれない薬効を持つハーブ

カモミールの語源はギリシャ語の『カマイ・メロン』で、『地面のリンゴ』を意味します。それはカモミールが、まるで甘いリンゴのような香りだったことに由来していると考えられます。カモミールはキク科の植物ですが、その原産地はヨーロッパから西アジアにかけてで、日本には十九世紀にオランダから渡来しました。和名はカミツレ。代表種として、ジャーマンカモミールとローマンカモミールがあります。

カモミールは最も歴史の古い民間薬の一つで、四千年以上前に、バビロニアで、すでに薬草として用いられていたといわれています。また、エジプトでは最高のハーブとして神への捧げ物に使われていました。実際、カモミールの製油には、数々の有効成分が含まれていることが実証されています。中でも〈アズレン〉は〈抗炎性〉に優れています。そのため、口内炎や皮膚炎等に有効で、多くの薬剤や化粧品類に用いられています。また、この成分はローマンカモミールより、ジャーマンカモミールの方に、より多く含まれています。そして不思議なことに、このアズレンはカモミールの生の花の中には存在せず、製油を製造されるときにのみ形成されるものなのです。

カモミールには、その他多くの薬効成分がみとめられ、やけど・結膜炎・気管支炎・胃腸障害の軽減にも役立てられています。

ハーブとして、我々の最も身近な利用方法としては、ティーバッグとしてもよく知られているカモミールティーでしょう。カモミールには、もう一つ大きな効用として〈神経を鎮める作用〉があります。夜休む前に飲むカモミールティーは体を温め、またやさしい香りを感じながら、そのリラックス効果で、気持ちのよい眠りへと導いてくれるでしょう。

〈今号の表紙／チューリップ〉

●話題

交易の軌跡をたどる…

朝日放送（ABC）では、日本・ベトナム国交四十周年を記念して両国の歴史を振り返る特別記念番組が放映されました。日本人が初めてベトナムの地を踏んだのは、西暦七百四十三年。そこから約千三百年の歴史をたどる一時間の番組は興味深いものでした。交易がさかんになった中世の朱印貿易ですが、なかでも大変貴重なものとして堺に持ち帰られたものが『香木』でした。それがきっかけで、『線香』が生まれ、堺は線香発祥の地となったのです。ベトナム領事館が堺にあるのも納得できますね。番組ではそのルーツをたどり、ベトナム人レポーターのマイさんが梅栄堂を訪ね、その時代から日本に伝わった香木の話でたいへん盛り上がりました。両国の友好のために放送された当番組のように、今後とも、よりよい関係が続いていくことを願って止みません。

恒例になった二つのビッグショー

一つ目は、NY NOW 2013（NY国際ギフトショー改め）、もう一つは東京ギフトショーです。八月に開かれたNY NOW 2013では、あらたに斬新なデザインの《香立て》に人気が集まっていました。NYの中心マンハッタンの紀伊國屋書店でも梅栄堂のお香・お線香がお求めいただけます。是非一度お立ち寄り下さい。東京ギフトショーもおかげさまで連日ブースは盛況でした。

新しい線香開発

日経新聞では近畿経済の「市場を創る」のページで、約十年前コーヒーの線香を考案、その後、緑茶を練りこんだ線香など次々と新しい線香を考案したとして、梅栄堂を取り上げました。また、NYの見本市でも海外用ブランド《IMAGINE》を提案、特に緑茶の香りの線香が話題を呼んでいるとの紀伊國屋書店でのお線香がありました。

◀堺市の伝統産業のブースに出展し「原料のこだわり」を評価された東京ギフトショー

●商品紹介

心なごむ香りをご進物に。

梅栄堂の《残香飛》（煙ひかえめ）、《煎香茶》（煙ひかえめ）は、オリジナルな香りのお線香として、ご好評をいただいております。この香りを、ぜひとも先様にもお届けいただこうと、新たにご進物用を新発売いたしました。それぞれに、心なごませる〈コーヒー〉と〈お茶〉の香りは、お届け先の皆様にも、お喜びいただけるかと存じます。ぜひともご利用くださいませ。

●煎香茶 煙ひかえめ
短寸小把10把入桐箱
5,250円（本体価格 5,000円）

●残香飛 煙ひかえめ
短寸バラ8箱詰桐箱
3,150円（本体価格 3,000円）